

# 巻 頭 言

教養部長 中 田 友 一

平成3年(1991年)大学設置基準が大綱化されてから、我が教養部は教養改革の経過を毎年この『教養教育研究』にまとめてきた。そして今回で第8号となろうとしている。まずは今度もこうして編集を進めて下さった委員の方々に感謝致します。

大綱化の後で国公立大学や、私立大学のほとんどの教養部が廃止、あるいは新学部開設となった。教養部を廃止したら、日本経済のバブルがはじけ、オウム真理教のサリン事件が起きてきた。また最近では大蔵省役人の接待問題が出てきて、教養と教養部の必要性が見直されてきた。その点中京大学では、理事会や学長はじめ他学部の協力の下で教養部を廃止しないで残す方向で進んで来た。

最近ではマスコミでも教養について言及されてきている。「教養って何ですか」と学生に聞かれ、それに答えて、立花隆氏が今年文芸春秋に第4論「東大生諸君、これが教養である」と言う文章を連載している。そこで彼は「教養とはすなわち文化であり、それは頭の中を耕すことによって、身につけるものである。覚えるものではない」と語っている。またそれを引用して安土敏氏が日経ビジネスに「教養ある真のエリートを育成しなければ、日本の21世紀への展望は開けない」と書いており、「世界文学を好み、音楽や美術を愛し、世界や自然に限りない好奇心を持つ人物が必要だ」と述べている。

一方、7月には大学審議会の中間まとめ「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の中で、カリキュラム改革の問題点として次のように教養教育の反省が述べられている。「平成3年に大学設置基準が大綱化されて以来、多くの大学でいわゆる教養教育と専門教育の連携に配慮したカリキュラム改革が進められているが、大綱化に当たって本審議会としても教養教育の重要性を指摘し、各大学の取り組みを期待したにもかかわらず、教養教育の取り扱い方についての学内の結論が十分でなく、教養教育の軽視が進んでいるのではないかとの危惧がある。」

こうした背景のなかで、今年は大学基準協会への提出という課題もあって、中京大学として自己点検評価報告書が作成されている。さらにそれとは別に、教養部自己点検・評価委員会は昨年度、学生対象の授業改善アンケートも実施した。その報告を今回の第8号に掲載することになった。さらに各地で進められてきた大学改革について、昨年千葉大学の草刈英榮氏が「大学改革に伴う教養教育の現状と課題」と題して中京大学教養部で講演して下さった内容も、とても素晴らしいので掲載することになった。これらは今後の教養部のあり方を考えるよい資料となるであろう。